

---

# カタチをもたない心

フーリエ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

カタチをもたない心

### 【Nコード】

N7766Y

### 【作者名】

フリーエ

### 【あらすじ】

道徳と背徳。

大切な人がいるのに、わかっていながらも恋心で乱れてしまう。  
衝動的な一線を越えたところにある世界とは？

## はじまり(前書き)

二人は、ごく普通の年の離れた同僚だった。  
研修旅行でのトラブルから初めての秘密をもつ。

## はじまり

部屋は、時折青光りする稲妻に照らされていた。

ずぶ濡れの二人は、髪や衣服から水滴を滴らせながら部屋のバスタオルで体を拭いていた。

美穂は、なぜこんな状況になってしまったのか？ドキドキしながら考えていた。

「チーフ、大丈夫ですか？」秀也が声をかけた。

「あつ、今は、平気。佐藤さんと途中で会えてよかった。一人で道に迷ったときはどうしようかとおもった。ホント助かったよ。」

「いやーあそこでペンションのオーナーに会わなかったら、かなり悲惨でしたよ。」

「僕はすっかり携帯忘れるし、チーフのは電源切れ。参りましたよ。充電器とかあるのかな？」

「そうね。無線と電話が今使えないって言ってたからね。こんな山奥で最新型のスマホの充電器は、ないんじゃない？」

「オーナーが、もう少し雨がましになったら車出すって言ってたから、それ乗せてもらいましょう。」

「そうしよう。」

・・・4時間前・・・

新人社員研修に引率で美穂と秀也は、講師を出迎えたあと、2日間缶詰の講習が始まったと同時に引率業務から一時解放され、自由時

間になった。美穂は、広大な研修施設を完備したホテルの敷地内を散歩していた。しかし、どこかで標識がまちがっていたのか？戻れなくなってしまった。

丁度その頃、秀也も敷地内のテニスコートで同僚と汗を流したあと、フロントで敷地の外れに露天風呂があると聞き、そこを指指して歩いていたら道に迷ってしまった。

美穂は、気付けば後ろも前も草むらでどこがどっちだか？わからない状況に追い込まれていた。携帯持っているから大丈夫とたかをくくっていたが、充電切れしてしまっている。

小雨が降りだし、気温が下がり始め、究極に心細くなっていた。

そんな矢先に背後の草むらがガサガサと音を立て、一瞬恐怖を感じて振り返ると、そこには浅黒く焼けた長身の佐藤秀也が現れた。

「どっとうしたの？佐藤くん」

「チーフ？何してんすか？」

そこから、小一時間歩いたところで、雨が土砂降りになり木陰で震えているところで

山小屋のオーナーに出会った。

オーナーは、毎日このあたりを散歩しているらしかった。

静かな老人で、二人に山小屋の一室を提供し、暖を取るよう勧めてくれた。

・・・山小屋・・・

「チーフ。シャワー先使ってください」

「ありがとう。」

オーナーが置いていってくれた白いガウンを一つ手にとりシャワー室へ向かった。

シャワーを浴びながら、普段の自分では考えられないくらいドキドキしていた。

何があるってわけでもないと言いつ聞かせても、しょうがない程胸が高まる。

さっきまで遭難しそうだったから忘れていたが、転職してきた佐藤が気になっていたのだ。

もちろん、夫のことは愛しているし一番大事だと思っている。

しかし、惹かれてしまうのだからしょうがない。

一種の熱病だと思ってほば気持ちを見殺ししようとしていた。

8歳も上だし・・・結婚しちゃってるし・・・しょうがない奴だな私。。。

シャワー室の洗面台で鏡に映る自分を見る。

熱いシャワーが体温を戻してくれたのか、頬に赤みが少し差している。

紅潮しているのか唇も赤くなっている。

ガウンをきてみると、少し小さめなのか胸の谷間がどうしても隠しきれない。

バスタオルをたたんで胸のあたりを隠すことにした。

「佐藤くん。どうぞ。」

大き目のストープに暖を取ってベッドのへりに座って待っていた秀

也に声をかける。

「あつ。どうも」佐藤は、ガウンをとると、即座にシャワー室へ行った。

「ストーブの周りの格子にシャツやズボンをかけて乾かすことにした。

ブラもショーツも男性の目があるとは言え、干さなければびしょびしょである。気にしていられない。

本当に黒の普通の下着で良かったと変なところで安堵している自分が少しおかしかった。

干し終わると、ベッドの毛布をかぶってストーブに手をかざしていた。

少し疲れたなと思っていたら・・・眠気が差してきた。

「チーフ？チーフ？」美穂は、ハツとすると佐藤が、自分の方を覗き込んでいたので驚いた。

毛布をかぶったまま、ベッドに横になってしまっていた。

美穂が、起き上がるうと毛布をめくった瞬間微妙にはだけたガウン姿をみて、

佐藤は、真っ赤になった。

「・・・。」美穂も視線に気付き、自分をみてみると

全部出ているわけではないのだが、胸の谷間が今にもでそうになり、太ももが少しはだけた状態だった。

「あつ。ごめん。ごめん。」そそくさと身を整えた。

「あつ。その・・・すみません。」

「佐藤君がなぜあやまるの？悪いことしようとしてた？」いたずらっぽく言ってみた。

「そんなことありません！」まじめな佐藤は、頬を紅潮させて、言

った。

「ごめん。からかっただけ。怒った？」

「いえ。別に」視線が合う。

美穂も場の雰囲気を変えようと妙に明るい声で「そうだ、ストーブに洋服掛けるといいよ。」

「そっ、そうですね。」

無言の中、土砂降りの雨音だけが2人だけの部屋に流れる。

ポットのお湯でコーヒーを入れることにした。

サイドボードの棚からインスタントコーヒーの瓶をとり

「これってスプーン2杯くらいだっけ？」とか話していたら

佐藤が隣に立ち、マグカップだからもう少し多い方がいいかもと手をだしてきた。

長身の佐藤の目線からだど、美穂の胸元はかなり際どく見えていた。美穂の方を見てはいけないと視線を不自然にずらしていた。

「佐藤君、ねえ、佐藤君？お砂糖とクリープ入れる？」と聞かれて、美穂の方をちらっとみると白い大きな胸が目飛び込んできた。下半身にジワリと血流が廻った。

「入れます……。」

美穂が、「はい。どう……」どうぞと言う前に秀也は、これ以上、余計に昂ぶらないように離れようと、マグカップをよく見ずに手に取るうとした。

そのとき、手の甲でマグカップを勢いよく倒してしまった。熱いコーヒーが美穂に少しかかった。

「あっっ」

ハツとして秀也は、振り返ると美穂のガウンの胸元から下にかけて、茶色く染みがついていた。

「すみませんっ！」秀也は、自分のバスタオルを咄嗟に美穂の胸元当たりに当ててしまう。

「あっ」かすかな声をあげた美穂の胸元に秀也は手を抑えつけていた。

まるで胸をつかむ格好に。

あまりの柔らかさとこの状況で頭が真っ白になった秀也は、一瞬間まってしまっていた。

二人とも視線を放すことができなくなった。

どちらからともなく・・・口づけを交わしていた。

理由もなく。ただ求めるままに。

無言で互いの唇をついばみながら、もどかしく互いの気持ちを確かめていた。

二人で口づけを交わしながら歩いて横向きにベッドに倒れこんだ。

倒れこむと同時にウエストできつく縛ったガウンの上の部分がはだけ、片方だけ乳房が露わになった。

完全に興奮しきって隆起していて、秀也の細い指先が、少し触れるだけで

「っっはあっふん」と艶めかしい声が漏れた。

早すぎる自分の反応に驚いた美穂は、気になっていた相手だとこんなに興奮するのかと思いついた瞬間でもあった。

「見ないで・・・。」かすれた喘ぎ声と共に顔を片手で覆った。  
美穂の手首を握り、ベッドに押さえつけ、胸だけガウンから露わにした格好で

秀也は、舌先乳首を転がし、唇で強めに噛んだ。

「っあつは・あうん」執拗に片手で優しくいじりながら唇で乳房を愛撫していた。

美穂の太ももは、硬さが増した秀也自身が、愛撫の度に押しつけられ、奥から湧き上がってくる熱さに何も考えられなくなっていた。

「チーフっ・・・チーフっ」

「美穂って呼んで・・・」

「ミホ・・・さん・・・。」耳元に息がかかり、美穂の全身にゾクツと電気が走った。

自分ばかり気持ちよくなっていた美穂は、反転して、秀也を組み敷く格好になった。

秀也の片手首を押さえ

「しゅうって呼んでいい？」と直視した。「はい。」

秀也の耳元で「しゅう・・・。」と囁き、片手で秀也の鎖骨から乳首にかけて手を滑らせた。

美穂の左の内腿の柔らかい部分で秀也自身を優しくガウンの上から撫でながら・・・

これまで、秀也は、厳格な家庭で育ち、奥手で付き合っている女性とも手をつないだりキス程度でその先までは経験がなかった。

大学も自宅から通いそのまま就職したため、27歳でも実は体の経験は初めてだった。

理系の彼は、ほとんど男ばかりの環境だったせいだろうか？日常でそれほど強い性欲を感じたことがなく、自慰で十分満足していたの

だ。

しかし、生身の女性を至近距離で見たのは初めて近くに、こんなに興奮したのも生まれて初めてだった。

美穂は、秀也を組み敷いたままキスをし、秀也のガウンの前をめくり秀也自身を直下で撫で始めた。

「ツウツハアツ。ミ・ホ・さん。ダツ」

秀也の先端は、艶めかしいほど赤ピンク色で透明のほとばしりが先端をてらてらと光らせていた。

「私の手がしゅうのでベタベタ」熱い吐息を秀也の耳元に吹きかけた。

「ミ・ホ・さ・ツウツハアツ。ヤメッ」

興奮しながらも美穂は、秀也が快感に対して余裕がないので、初めてなのではないかと気付いた。

少しサディスティックな気持ちで、力なく美穂の左手の動きを阻止しようとする秀也の右手を頭上にもってきて、手の自由を奪いわきの下あたりに口づけ吸いついた。

秀也を扱っている左手を早めた。

「ミ・ホ・さ・ツウツハアツ。ヤメッ・ヤツ・アツ・アツ・アツアツ」

白いほとばしりが勢いよくビュッビュッとほとばしった。

「はあっ。はあっ。」と息使いだけが聞こえる。

秀也の上に重なり、胸の上で息使いを聞いていた。

かわいい。体は大きい、何もほとんど知らない。そんな余韻に美穂は、浸っていた。

秀也が体を起こしガウンで出したものを拭い、無言で美穂に覆いかぶさって、口づけしてきた。

胸を揉みながら、ウエストのガウンの紐を解き、露わになった下腹部を撫で始めた。

美穂の敏感な先端に指先が辿りつくどと驚いたように手が離れた。大変な量の蜜が溢れていたからだ。

「しゅうのせいよ。あなたが・・・いやらしいから」

秀也は、さっきの攻め立てられた自分の姿を思い浮かべかあつとなつた。

サディステイクな気持ちになりクリトリスを強めにこすり始めた。

「あつ・・・は・あふうん」「いやっあ。そんな強くしないで」

秀也は、心配そうにはつとして手を弱めた。

「いやっ・・・そうじゃない・・・よ。」「いやってことはその反対・・・」

かああつと赤くなつて秀也は、手をまた動かし始めた。

美穂の花芯にたどりつくどと、柔らかいのに意外にもきつく締まっていたが、思い切つてそこに中指を差し込んでみた。

「ひゃあつ。あつ。」「花芯の内壁は、凄くヒダヒダになっていてギョツとしまっていた。

中指の腹にあたる部分は突起状のぶつぶつがあり、気になってそこを押ししてみると

「いやっ・・・はあつ・・・」美穂が尋常ではない乱れ方をした。

美穂にとつては、完璧なGスポットだったのだ。

秀也は、ソコを逃すまいと腰を強く抱き、攻め立てた。

「はあうん・・・いやっ・・・ひゃあつ。おかしくなるはあつ・・・はあつ・・・」

秀也自身も隆起しきつてしまっていた。

「きて。。しゅう・・・や」「ミホさん・・・」「さつと上のりになり花芯の中心に先端を当てて

一気に押し込んだ。

美穂は、「あっ・・・はあうん」と大きく喘いだ。信じられない位の熱さに秀也自身びっくりしていた。

先ほどの内壁の突起が、腰をグラインドさせるたびに自身にまとわりつきぶつぶつした刺激を与える。

先ほど、達していないければ、数回で逝ってしまったかもしれない。

花芯の上壁を亀頭でえぐるようにグラインドさせ、奥に思い切り押し込むと、美穂が、声を殺しながら

狂ったようにに喘ぐのを見て、攻め立てた・・・

ベッドの上では、低い呻き声と声を殺した喘ぎ声、ギシギシときしむ音が激しさを増した。

「ひゃあん。」声にならない声を美穂が発した。

その瞬間、花芯から秀也自身を抜き出し美穂の白い腹に精を放った。

ぐったりと二人は重なり・・・

息使いだけが部屋に聞こえていた。

## はじまり（後書き）

衝動的に関係を持ってしまった二人。

ただ、美穂は、ただ一度のことではなかったことだと秀也に言い聞かせる。

二人は、このことは忘れようと堅く約束する。

## ざわめき(前書き)

一夜かぎりの出来事として美穂は、秀也と何事もなかったように日常に戻る。

そんな矢先、美穂は、秀也への気持ちに気づかされて愕然とする。

## おわめき

「おはようございます。」

美穂の下でアシスタントをしている仁美が軽く会釈する。

午後一のプレゼン資料のチェックをしていた美穂は、「おはよ」とちらりと仁美に目をやった。

その先に、秀也が自席に座っていることに気付く。

あの夜の出来事から土日をはさんで3日。以来、彼の姿をみるとまだ緊張が走る。

おかげで、鼻からそっと息を抜くような溜息で緊張をほぐす癖がついてしまった。

ただ、完全に二人ともポーカーフフェイスで何事もなかったかのように問題なく過ごしている。

そんな日々が、2週間続いてほとんど、自然にふるまえるようになってきた。

彼は、まだ28歳だし、まだまだ将来があるんだからさっさと忘れよう。忘れよう。

可愛い彼女ができて、いや、今もっているかもしれないし・・・その子と幸せな人生を歩めばいいんだ。そうするべきだ！私だって、主人を大切にしなきゃ。なんてことない。ちよつと発情しただけ。

不倫なんてまっぴらよ。自分の性分にも合わないし！

こんなことを気付けば、朝・昼・夜 ずっと言い聞かせている。

特に夜顔を洗った時、自分と彼の年齢差に気づかされる時、より強くそう思うのだった。

実際主人のことは、とつても矛盾しているが大切に思っている。ただ、恋しているときのような”トキメキ”がないだけだ。だから、あんな衝撃的体験をするときらめいてみえるだけなのだ。

簡単に発情してしまったのも、自分自身理解ができなかった。そんなに性欲をこれまで感じたことがなかったからだ。

実際夜の方は、互いにたんぱくで、ここ数年一緒に寝ることはあっても軽いスキンシップだけでまったくしていなかった。

年齢的なものもあるのだろうか・・・。

とりあえず、美穂は、キレイに気持ちを整理したつもりでいた。

\*\*\*\*\*

「チーフ！」

終電間際の駅までの道で突然、部下の仁美が、後ろから駆け寄ってきた。

「あつ仁美ちゃん。先帰らなかった？」

「近くで友達と飲んでたんです。彼女地下鉄で私JRだから。」

「合コン設定しろってうるさくて……。」

「そうなんだ。」

「チーフ？マーケの佐藤さんって彼女いるんですかね？」

「へえっ??？」「衝撃を悟られないように答えた。

どきつとした。なぜここで秀也の名前がでてくるのだ？  
いや過剰反応しているのは自分か？

「どうせ設定するなら、彼呼びたいんです私。」

「そっそうなんだ……ゴメン知らない。」

「そっかぁ……明日聞いてみようかな。」

「そうねえ。ランチでも行って聞いてみたら。」

何言ってるんだ私。いやっ対応として正しいだろう私。

2つの交錯する想いを胸に伝えていた。

翌日……。

帰る間際、エレベータ前で秀也は、仁美に呼び止められた。

「佐藤さん！突然すいません。あの……合コンとかOKな感じ  
ですかぁ？友達に設定しろってせがまれてて……。お友達とか誘  
つてくれるとたすかります。お願いします!!」

秀也は、仁美の突撃に少し驚きながらも「あつわからないけど、誘ってみます」と言った。

美穂は、化粧室から出たところでそのやりとりに偶然遭遇した。愕然としていた。

「嫌だ!」と思う自分と「それでいんだ。」と思う自分に・・・。

そのあと、仕事は全然進まなかった。

気持ちを整理する為に、誰にも教えてないブログにその気持ちを吐き出した。

ブログの最後の行には、こんなことが書かれていた。

\* \* \* \* \*

7 / 2 2    2 3 : 0 0

・  
・  
・

あなたを縛りたくないけど、縛りたい自分がある。

できれば、社内の人とは、うまくいかないでほしい。

ただ、好きなだけ。ただ、好きなだけ。

主人のことを大切に思っているのに、その気持ちも同時にある。

あなたの幸せを願っているけど、それは私の見えないところで叶えてほしい。

もう2度とあなたとはどうにかなるつもりはないのだけど・・・

こんな都合のいい考え方であなたと付き合えるはずもない。

あなたが私を求めてくれるはずなんてない。

\* \* \* \* \*

息苦しい気持ちで美穂は、自分をなだめるようにPCの電源を落とした。

ぼんやりしながら、帰宅の電車の中で

Franz Liszt の Consolations を繰り返し聞いていた。

<http://youtu.be/4a0DheeUZjo>

Lisztは天才ピアニストとして華やかな人生を送ったと思われるが、

両想いだった令嬢の両親に引き裂かれる形で、令嬢が別の人と結婚してしまい、

絶望して人生を送っていたことは、あまり知られていない。

そんな彼の生い立ちにどこか共感する気持ちが美穂にはあった。

なんて、自分は、愚かな女なのか・・・どうしようもない・・・  
ましてや、1度衝動的に関係を持っただけ、彼に、気持ちなんてあるわけがない・・・。

彼が、私を引き寄せてくれるわけもない。

誰にもくみ取られることのない想いを抱えて重い足取りで帰宅の途についた。

## ぞわめき（後書き）

好きだという気持ちといよいよ向き合わなければいけない美穂。相手の気持ちを確認すること自体がリスキーである。どのような選択をするのだろうか？

## いましめ

最近、美穂は、一人でランチを取るようになっていた。

同僚との何気ない会話さえ苦痛を感じるようになっていた。

ランチメニューもしつかり見ずに一番上を指さしてオーダーを済ませる。

秀也が部下と合コンに行くを知ってからどうにもならないこの気持ちなだめるしか術がないことに落ち込んでいた。

秀也とどうなりたいなど望める立場でもないし、主人を傷付けたり裏切ったりするつもりでも無いことが一番矛盾しているが好きなこととはしようがない。

実際彼と淫らな関係をもってしまったが、それを繰り返すというより、悩み事や愚痴なんかきいてあげて楽しく過ごしたい気持ちのほう膨らんでいるのだ。

仕事を続けてきた人間として、働いていない女子とは違う面で親友的な立場になることは出来ないだろうか？そんなことをとめどなく考えていた。

彼の笑顔を見れるだけで・・・

36にもなつていまだときの高校生でも思わないようなそんな気持ちになつていた。

1度きりの浮気と思うことで、不倫という自分が一番軽蔑すること  
にしない最後の気持ちの砦になっているのかもしれない。

大人になると責任というしがらみがある分、掛け値なしの自然に好  
きという気持ちの大切さが身に染みてわかる。

なぜ秀也とこんなふうになってしまったんだろう。

どうにもならないきもちを少し冷めた食後のコーヒで流し込んだ。

## ゆらめき

秀也は、出来るだけあの日のことは思い出さないようにしようとしていた。

同僚との合コンに行つて気を紛らわしたほうがいいと考えていた。

他の女性と接点を持てばあのことは自然と忘れるだろうから・・・

美穂と同じフロアで姿をなるべく視界に入れないようにしていた。

自分にとって初めての女性・・・

視界に入るとじっとみてしまいそうだから。

8歳も年上の女性が気になったりするなんて自分はおかしいんじゃないだろうか？

しかも人妻ないじゃないか？

本当に転職したばかりでなかったら仕事場をかわりたい心境だった。

「佐藤？さとうっ！」

肩を叩かれた。困り顔で吉武が立っていた。

「参ったよお。お前がデータの分布図作ったから間違ってるわけないってノーチエックでだしちゃったら試算結果がおかしいってクライアントがカンカンでさー。明日朝一でもってこいって・・・。でも、俺これから接待でさあそんな時間が無いんだよお。頼むっ借りはかえすからさあ」

時間をふとみると定時の19時をまわろうとしていた。

「わかった。僕にも責任あるし。」秀也は引き受けた。2日かけて

作った資料だったが一から作る訳ではないから3・4時間もすればできるだろう。

同僚達が

「お疲れ様でした」

「お先でーす」と一人、二人と退社していく。

すでにフロアは、秀也、美穂、仁美の3人だけになった。

秀也は真剣にパソコンとプリントした資料をチェックしていた。

仁美はコピーしたしりょうを美穂から頼まれてひたすらプレゼン資料を角2の封筒に入れていた。

ふとみると秀也がいるではないか？急いで終わらせて話し掛けようと思った。

作業机の上でトントンと資料を整え最後の1セットを封筒に入れた。すくつと立ち上がり、美穂が席にいないことを見はからい秀也のデスクに駆け寄った。

「あの今ちよつといいですか？こないだの件・・・」仁美は、返事を促すように目をみた。

秀也は「あつ。まだ何も連絡してなくて・・・」

コンビニでお茶を買って戻って来た美穂の目に秀也と仁美の姿が飛び込んできた。明らかに合コンの相談だろう。

「そうですね。あのお」仁美が話そうとすると

秀也はさえぎるように「ちよつと今急ぎの資料つくってて・・・その・・・聞く間を待たず仁美は話し出した。

「あのお。私佐藤さんと2人でも・・・」仁美が言いかけた。ふと仁美の方をみるとその奥に美穂の姿がみえた。

咄嗟に秀也は「ゴメン。やっぱり職場の人とは・・・」と切り出した。

美穂は、「えゝそんなぁ」食い下がろうとする。

秀也の困った雰囲気を察し、美穂は「仁美ちゃんもうできたの？」と背後から声をかけた。  
驚いた仁美は「ははっ。もちろん！」と答えた。「じゃあ今日はもういいよ。お疲れ！」  
仁美は「はい。」とこたえて自席のに戻りパソコンの電源を落とす。「お先に失礼します！」とオフィスを後にした。

## つまびき

オフィスには、秀也と美穂のキーボードを叩く”カタカタ”という音が途切れることなく続いていった。

仁美が帰って、秀也と美穂は、互いに軽く会釈しただけで席についた。

美穂は、なぜか安堵して仕事に集中できた。

秀也が断ったからだろう。

別にどうなるうとか思っていないけどなぜかとても心が落ち着いた。理由なんてなんでもいい「断った」事実が嬉しくて仕方なかった。

美穂は、急に心が軽くなって、最近、腑抜け気味だった仕事に邁進すべく、エンターキーを小気味よく弾いていた。

秀也も美穂が気にはなったが、×切もあるため、不思議とそれ以上そわそわすることはなかった。

すっかり仕事がかどり資料の最終チェックがやっと終わった。

「ふうああー。」と座りながら伸びをした秀也。

美穂にわからないようにチラリとみた。

パソコンの画面を注視する横顔は、こちらの様子など気にしていない様子だ。

「今日のごことは忘れましょう。」

あの日の言葉が蘇った。

美穂の完璧なカーフェイスぶりに本当にあの夜のごことはなかった。

た気さえしてくるのだった。

あれからすでに3ヶ月あまり経ち、季節は秋の様相を深めていた。美穂は、言葉通り本当に関わりを持ってこなかった。

また、それは秀也も同じことだった。部の飲み会などがあっても美穂がいれば、秀也は、うまく断ったり、参加しても早めに帰ったりしていた。

秀也の中では、あの日のことをどう思っているのか知りたい気持ちがあるものの、知ってしまうことで何らかのものが壊れる怖れも持っていた。ただ、先ほどの仁美の件では、少しお礼も言いたい気持ちがあった。

何か、自然にお礼を言う方法はないかと少し考え、残業している美穂にコーヒーを入れて「さっきは、ありがとうございました。」と伝えて帰ろうと思った。

コーヒーを注いで、美穂の席に近づき声をかけた

「お疲れ様です。」

「あつ……。お疲れ様〜。」「ドギマギする美穂。

「あのっ。さっきはありがとうございました。」とコーヒーを差し出した。

美穂は、コーヒーを出されてありがとうございますと言われ、瞬間あの夜のことを感謝されているのか？と馬鹿な勘違いをしたが、すぐに多分違うことを察し

「なんだっけ？」と聞いてみる。

「白川さんのことですよ。さっき合コンの件で詰められてて……」

「そうだったんだ。どうも」「何にも知らないフリをして、コーヒーを受け取る美穂。

意外にそっけない対応に秀也は、少し不満を感じた。もう少し嬉しそうに顔とかきたいしていたのに……。仕事を続けるフリをして

いる美穂は、最大限気持ちを外側に出さないよう細心の注意で緊張で張り詰めていた。すぐに「お疲れ様」と言って立ち去ってほしい気持ちでいっぱいだった。

その緊張からか少し硬い表情になっていた。秀也にはそれが、自分が美穂にとつて何でもない物のように感じる雰囲気に見え、何か、粗末に扱われたような気さえしてきた。

同時に、自分だけではないのでは？と疑念を持ってしまった。そんな猜疑心から不埒な女であれば、簡単に誘惑できる。試してやろうと考えた。

美穂の背後に立ち。腰を少しかがめて、美穂の耳元付近で小さく「美穂さん。」と囁いた。

美穂は、凍りついた。キーボードを弾く手が止まる。息をするだけが必死な状態になってしまった。

無言の空気の中。美穂は回らない思考を必死で巡らせる。美穂は、少しうつむいた。

男の人はわかっていない。

好きな人の声の響きがどんなに女性の感性をつま弾くか？

耳という器官は、五感の中で一番敏感な部分である。人間は、せまりくる見えない危険を察知するとき、最初に耳が働く。それで心構えや準備ができる。目で察知するころでは遅いのだ。

耳は、緻密な感知器のようなものだ。

耳元は、美穂にとつてもウィークポイント。耳の背後から方にかけてのラインは、多分胸や局部などよりずっと感じるのだ。そこを少しつばむように執拗に愛撫されたなら本当に逝ってしまうかもしれない。

何の反応もないので秀也もはっとして体を起こす。

どうしよう・・・一瞬悪魔的な気持ちになり試してしまった。

美穂は、微動だにしない。2人は50センチほどの距離にいるのに互いが全くわからないでいた。

美穂は、突然立ち上がると走り去ってしまった。

どうしていいかわからない秀也は、急いでオフィスを出た。

立ち去った美穂は、化粧室で少し泣いていた。

どうして秀也には、必要以上に全身が反応するのか？

高鳴る鼓動を必死で押さえていた。

自分を汚らわしく思った。

誰もいないオフィスには、美穂のモニターだけが光を放っていた。

## ただよう(前書き)

悩みを相談することにした美穂。親友と楽しい夜を過ごすのが・・・

ただよう

美穂は、行き場のないせつなさを誰かに聞いてほしかった。さすがにこのことは親友にも話せずにした。

高校から長いつき合いで七海という。

さすがに、話を聞いてもらうことにした。

七海は独身で端正な顔立ちできりっとしている印象のとても素敵な女性である。

なぜこんな美人が結婚しないのか？世の中は難しいものだといつも思う。

彼女とは、姉妹のような関係が続いていて、洋服の貸し借りはもちろん、良く互いの実家に泊まりにいたり、来たりしていた。たまにドジを踏む美穂を何かとサポートしてくれる。

結婚後は、美穂が上京した数年後、転勤で七海が上京し今も交遊が続いている。

\*\*\*\*\*

千駄ヶ谷のカフェで夕方の4時に待ち合わせた。

美穂は、夕飯も兼ねて相談するつもりだった。席に案内されカプチーノを頼む美穂。

七海はメニューをちらっと見ただけでブレンドを頼んだ。

「見るだけ無駄ね。メニューなんて七海みないもん。」

「違うよ」。注文する前に駿足でウエイトレスさんがもってくるから思いやりよ。」

いつもカフェで待ち合わせたときするお決まり話できやはっと二人は笑った。

たわいのない話をダラダラ続けていると七海が切り出した。  
「で？話したいことあるんでしょ？」美穂はうなづいた。

女友達には嫌われる可能性があるので、体の関係を持ったことは伏せてそれ以外を話した。

「すきなひとがご主人以外にいるけどご主人のことも嫌いなわけではないってことだよな？」

「そう。」カプチーノを一口のむ。

「そりゃあしょうがないね。叶わない恋もするでしょう。ヒトなんだから」

「いやっ七海そうじゃなくて。彼にはドキドキしすぎて、そのっ全身で反応しちゃう感じなの」

束の間の沈黙

ぶつと七海は吹いて「エロいっ！」といってクスクス笑った。

1時間弱話し込み晩御飯を七海が誘ってくれたので七海の家で鍋をすることにした。

\*\*\*\*\*

美穂はみぞれ鍋が絶対食べたいという七海に押し切られ、ダイニングのテーブルで大根を渡されひたすらすりおろしている。たっぷり大根がないという嫌だと言うことで、1本意地になってすりおろしている。

ふうっ。ふんっ。ふっ。と言う具合に段々息があがってくる。

「みほお。材料切れたよ！お大根はいかがかしら？」といたずらっぽくいった。

「あと3分の1で素晴らしいみぞれ鍋の素ができてよ!」と言いつ返した。

二人は、同時に顔を見合わせるとぶつと吹出した。

「さあてとお。いただきますか!」「頂きましょう!」と美穂が、鍋の蓋をあけた。

もわぁっとおいしそうな香りと共に白い湯気が部屋に散りぎえていった。

七海が福岡出張のときに土産で買った焼酎セットをだしてきた。

ぐつぐつ煮える鍋を挟んで「やっぱ冬は鍋だよね〜。」「といいながら向かい側に座った。

小一時間で鍋をつつきながら、焼酎を1本ほど開けるピッチで飲んでた。

お酒で酔いが回ってくると本音の気持ちが出しやすいのか露骨にでてきた。

「だんなも好きに決まってるう。もう何年一緒にいると思ってるの!七海!な・な・み。ねえ聞いてるうか?」

「はいはい聞いてます。聞いてます。」

「ただね。ただ、彼には反応しちゃうの!こんなのは初めてなの!」「初めてねえ。誰かとしたとか強く思うってことが初めて?」

「ななみいはあるの?たくさんそういう経験あるの?」  
唐突な質問に七海は、飲もうとしていた焼酎をぶつと噴出してしまった。美穂に少ししづきが1・2滴かかって、

「もおおう!」「ごめんごめん。」「と空になっているグラスに焼酎に瓶の口を手向けた。

美穂は、気付いてグラスを持ちあげた。

「いいよ。でっなんだっけ?」

「なんだったかな？」七海は誤魔化した。

「あつ。そうそう！したいと思う時だ！で今彼氏いるの？」

七海は、苦笑いしながら完全に絡みモードな美穂をどう扱うか考えていた。

話をそらすために良いことをとっさに思いついた。

「旦那さんに電話しなよ。美穂今日かなり酔っ払ってるし。泊ってけば？」

「あつ！それいいーそれいいところ。ケータイ」と立ち上がるうとしたところふらついているので

「取るよ。コート？鞆？」「コート」七海は、コートを手に取り美穂に渡した。

コートのポケットを探り「あたっ」と小さく言って電話をかけた。

「ごつ主人さまー。美穂です。今日七海んちに泊ります。よろしいですか？」

「いいけど。えらく楽しそうだね。」

「へいつ。只今みぞれ鍋大会を実施しております。焼酎を飲みました！あつ七海に代わるね」

「えつ。」七海は携帯を渡される。

「あつお久しぶりです。美穂さん結構酔ってて・・・今日はお預かりしますね。」

「すいません。ご迷惑おかけします。では」と携帯を切った。

「よゝしのむぞお。」少々荒れ気味？な美穂をみて、今日はお付き合いが長くなりそうだ七海は思った。

散々お酒を飲んだ挙句、美穂は横になって眠りだした。

「風邪ひくよー」とゆすってみるもの「うつつ・・・ん。」としか返ってこない。

「しょうがないなあ後ろから両脇を抱えて、ベッドまでひきづっていくことにした。

七海は、背が高くそこそこ力もあるので何とか引つ張ってこれたが、最後の力を振り絞ってベッドに持ち上げようとして勢い余って美穂を抱えたままベッドに倒れこんでしまった。美穂を体の上に載せる格好になって・・・。

「うーん！もっつ！」と七海は天井に向かって言った。

七海は、そのままなぜか黙って天井を見ていた。

どれくらい時間が経っただろうか？七海は、目をぎゅっと閉じて、両手でそつと美穂をだきしめた。

抱きしめながらこれまでの抑えていた気持ちと格闘していた。

美穂が結婚してから見守ることで心の決着をつけていたつもりだった。

ところが、どこの誰ともわからない若造に恋焦がれている美穂をみてどうにも気持ちがざわついていた。

自分は女だし、候補に挙がらないことは痛いくらい分かっている。

でも、苦しい恋をしている美穂の気持ち知り、封印していた自分の気持ちを蒸し返えされてしまった。

「うーん。」美穂が、小さく呻いた。はつと我に返った七海は、体を右へずらして、美穂を壁側に寄せた。

左手が美穂の下なので腕枕している格好だ。寝返りを突然打った美穂は、七海と向かい合う形になった。

寝言で「もつと。」と小さくつぶやいた。

七海は、全身に甘いしびれを感じた。やばいっつと七海は思った。

最初は、美穂が好きだったのだが、確かめるためにピアンバーに息美穂に少しでも似ているような女性を探している内に不特定多数お付き合いするようになった。

バーでは、特定の人を作らないことで七海は有名だった。七海は、その世界でいうフェムタチだ。タチというのは、女性同士でリードする側（奉仕？）する側のことでフェムというのは、外見が女性ら

しい感じのことをいう。

何も知らない人は、ビアンというのは、男みたいな女性に恋するものだと思われるかもしれないが、ゲイとおなじで女のような男を好き、男っぽい男が好きというのと同じである。

だから七海は全然ゲイであることは周囲にはバレていなかった。

目の前には、恋焦がれてきた美穂は、潤んだ唇で「もっと」と言っている。

こんなシチュエーションこれまでなかった！！！！！！

どうする？どうする？と切羽詰まり・・・その結果衝動に負けた。

「ちょっとだけ・・・。」相手はかなり酔っ払っている。もし目が開いたとしても！開いたとしてもこっちも酔っ払ってるフリをすればいい！

そっとくちづけた。柔らかい感触が、少しずつ七海のポルテージを上げていた。

ところが！美穂の方は、何と答えるかのように舌を絡ませてきた。

美穂は、夢の中で眠ったままの秀也にキスをしていたのだ。

思わず濃厚なキスの応戦を受けた七海は、興奮が高まってきて抑えきれず、右手を美穂の胸にあてていた。

美穂は、ビクンと感じてしまった。眠っている秀也が目を覚まして胸に触れていた。秀也に「どうしてほしい？」ときかれ、「耳を・・・。」と答えた。

お酒の飲みすぎとこの夢に浸っていたい強い気持ちで美穂を目覚めさせずにいた。

ブラウスのボタンを上から外して美穂の胸元が見え、ゴクリと七海は生唾を飲んだ。

美穂は、Eカップの豊満な胸をしていて思わず顔をうずめてくりぐりしたかったが、目を覚まさせてはいけないと我慢し、細心の注意

でブラの中身を出そうとしたとき

美穂が「みみ・・・」と寝言でつぶやいた。

七海は、耳を愛撫することにした。舌先を耳の穴から渦を描くように耳のカタチにしたを這わせる。

「あつ。つつうんっ」甘い声が美穂から漏れた。七海は嬉しくなつて、執拗に息をかけたなり耳たぶを吸つたりして愛撫を続けた。

「はあはあふっんっ」美穂からいつもとは違うかすかないかんの息使いが伝わってきた。ブラをめくり乳房を優しくだと、乳房の先が、ピンとたっていた。

七海は、理性が吹っ飛んだ。上体を起こして、美穂に半分覆いかぶさると乳首に吸いついて自分が与えられる限り、みだらな刺激を与えた、同時に美穂のスカートに手を滑り込ませるとパンストの上から下半身に刺激を与える。女同士だ。どこがいいかなんて男なんかよりわかる。刺激を与えているとパンティとパンストを通り越して、蜜があふれ出していることがわかってきた。片手で器用にパンストとパンティを下すとすぐに指を秘所に当てて直接敏感な部分を刺激し始めた。花芯から蜜が溢れだしていたので、すぐに七海の指をスルリと飲みこんだ。

美穂の中は潤みきつていて指の腹に何かぼつぼつとしたところがあり、動かしてみると幾層のヒダがあることがわかった。いわゆる名器だなと確信した。

花芯がひだ状になっていて男性が律動を繰り返す時、男性自身をそのヒダが引つ搔くため、一度夜を共にすると病み付きになってしまうという類のものだ。

指をぶつぶつの突起の山のようなところで強くこすると「ひゃあつ。あつうんっ」と反応する。美穂が、みだらでいやらしすぎて、七海も本当に興奮が頂点に達していた。

無心にそこだけを責め続けていると「しゅっつ。。。やあつあつ。」と啼くとビクツとして逝ってしまった。そして、深い眠りに落ちていった。

「しゅう・・・？」七海は、興奮が一騎に冷めてボタンと仰向けになり天井をみつめていた。むなしさが漂った。

そのあとは、少し美穂を起こして服が乱れてるからと言ってなんとかパジャマを着せた。

甘いしびれが残る七海は、美穂の横で自らを慰め、達して眠った。目じりに涙が光っていた。

翌朝、美穂は目を覚まし、何だか体がだるいなと思いつつシャワーを浴びた。

自分の潤みがすごいことに気付く。昨晚リアルすぎるいやらしい夢を見たからだろうと思った。

七海は、飲みすぎなのか何だか元気がないなと思いつつも、昼には、七海の家を後にした。

## ただよう（後書き）

七海と関係を持ったことに気付いていない美穂、秀也と関係を持ったことを知らない七海。互いの想いを知らずに迷走が始まる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7766y/>

---

カタチをもたない心

2011年12月14日03時45分発行